

人間分子の相互作用 3 – 正の循環と負の循環

“可愛さ余って、憎さ百倍”

影響距離が極めて近く、我々の生活・人生に良くも悪くも大きな影響を及ぼし得るバランスポイント近傍（図15点C～E）における人間の相互作用について考察してみましよう。人間分子論に従い、我々は自律的な幸福を追求します。他分子に対して見返りを求めない配慮（和化）を実施することにより、自分も相手も精神充足を得ることができます。「和化」の項で詳しく述べていますが、同じ配慮を、自分が相手に施した場合と、相手から施された場合では、記憶の重みづけが異なり、自分が施した場合の方が過大に評価されてしまうものです。従って、「和化」の交換で、2分子の精神充足の収支決算のバランスを取ることは、それほど簡単なことではないのです。だからこそ、和化は見返りを求めない＝掛け捨ての配慮を、前提とするのです。相手への施しが、掛け捨てで済むような影響距離の遠い関係性なら、それはそれで問題ないでしょう。しかし、バランスポイント近傍では、その影響距離が近い分だけ、相手を思う気持ちが強く、施しが掛け捨てでは済まず、ヘビーなもの（相手への高価なプレゼント、特別な配慮など）になりがちです。このような状況下で、和化の交換がお互いに見合わない赤字決算になってしまうと、2つの分子には強烈な斥力がお互いに働き、負の悪循環となって、破局へと向かうことになってしまいます。可愛さ余って憎さ百倍の状態です。一方、和化の交換が、お互いにプラスの黒字決算になると、2つの分子には強い引力が働き、正の好循環となって、相思相愛、ラブラブで良好な人間関係が構築されることとなります。昨日まで大親友だった二人が、些細なことをきっかけに大ゲンカとなり、あっという間に離別することはよくあることです。バランスポイントから少しどちらかにずれるだけで、正あるいは負の循環の渦に取り込まれることになるのです。

自分の相手に対する配慮が過大に重みづけされ、自分は相手のためにこんなにやっているのに、相手はわかってくれない、配慮が足りない、と一度赤字決算になると、その精神的ストレスが相手に向かいます。当然、相手分子は負の和化を受けることにより、さらなる精神的ストレスを受けて、赤字決算となります。このように和化の負の循環がぐるぐると巡るのです。負の循環を脱するには、影響距離の遠い分子に対する接触方法（4つのショウ）を参考に努力するしかありません。まずは、ケンカにならないように距離を取り（消）、落ち着いたところで最少接触をはかり（小）、頑張って目じりと下げて口角を上げ笑顔で相手を迎え（笑）、相手の土俵に乗って労い・感謝し・共感する（承）、ことが肝要です。そのような努力をもってしても、負の循環を解消できず、分子同士の関係が破たんした場合、文明相における人間関係は、その分子あるいは組織と離別し、自分の内部からその世界を丸ごと消滅させることもできます。しかし、生物相における血縁関係は消滅不可能です。そのことを考慮し、生物相における離別・破たんを回避するため、最大限の努力で和化の継続が試みられなければなりません。夫婦関係は、子供がいなければ、文明相の関係として、離婚でリセットすることも可能ですが、子供がいると、その血縁関係を離婚で消滅させることは不可能となります。親子の勘当も同様で、法的措置でその血縁関係を消滅させ

ることは出来ないのです。

おしどり夫婦と呼ばれるカップルは、和化の正の循環が生まれていることが多いものです。こんな私のために優しくしてくれて、こんな俺のために尽くしてくれてと、相手から施される配慮が、自分が相手にする配慮を上回っているという無意識の精神充足がお互いに働くために、もっともっと相手のためにしてあげようという和化の好循環が生じるのです。もともと影響距離が最接近するわけですから、大切な価値観が共有されているのですが、それだけで正の循環を維持することは難しく、自分の欠損しているものを相手が補ってくれる、相手の欠損を自分が補ってあげる、という補完関係（Complementary）が必要なのではないのでしょうか。大切な点は、いずれも見返りを求めているわけではなく、無償の配慮、感謝の応酬、の結果として、好循環を生んでいるという点です。2つ補完しあって、はじめて1つの双極分子として一人前という、相手と自分に対する謙虚さ、尊敬が、大切です。破れ鍋に綴蓋、とはよく言ったものです。人間関係の正の循環・負の循環は、相手がいることなので、自律的努力だけでは達成できない面があります。そのため、自律的幸福を目指す人間分子論は、良好な人間関係を幸福の原因として認めていません。しかし、2つの分子の自律的幸福追求の結果として、このような正の循環による良好な関係が生まれた場合、お互いの承認欲求は充足され、多大な幸福感が得られるでしょう。このことは、多くの調査が指摘しているところです。自分自身が自分を認めることは必須としても、自分以外の他分子（ほとんどの場合、伴侶、あるいは家族）が、世界でたった一人でも自分を承認してくれているという事実は、とてつもなく心強いものです。